

金堂 国宝

鎧坂（侍の鎧のように見えることからこの名がついた）の石段の頂上に位置する金堂は、9世紀に建てられたものであり、室生寺の中でも最古の建築のひとつとなっている。柿葺きの板屋根で、開けた砂礫段丘の前の高床式の構造という一風変わったデザインとなっている。この砂礫段丘で祈祷が行われる。

金堂の須弥壇は舞台のような空間になっていて、素晴らしい仏像が並ぶ壮観な光景となっている。5体の大きな、光背のついた仏像の前には12体の小さな仏像が並ぶという、仏教寺院としては珍しい配置になっている。中心に位置するのは釈迦如来（仏陀）の像である。そのすぐ左横には超越的な知恵の実現を表す菩薩である文殊の像、次いで慈悲の女神として知られる十一面観音が並ぶ。釈迦如来のすぐ右横には医と癒しの仏陀である薬師如来、次いで衆生の救済者であり子供や旅行者の守護者でもある地藏菩薩が並ぶ。これらの前には並ぶのは十二神将である。これは鎌倉時代（1185～1333年）につくられたものである。これらの精巧につくられた、生き生きとした戦士は、12の方角を守護しており、それぞれ十二支の動物を頭の上に載せている。これらの像の数体は2020年3月から宝物殿に安置される。